令和8年度　学校研究の構想

1　研究主題

「一人一人の子供を主語にした授業づくりを目指して」（3年次）

～全ての子供の可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実～

2　主題設定の理由

【社会的な背景から】

新型コロナウィルスのパンデミックや急速な AI の普及、DX による社会構造の変化など、現代の社会は複雑で予測困難となってきている。このような時代だからこそ、一人一人の子供が、民主的で持続可能な社会の創り手となることができるようにするためには、自らの意思をしっかりともち、主体的に考え、多様な他者と協働しながら納得解を導き出すことができる資質・能力の育成が求められる。そして、学校教育は、生涯にわたって学び続ける基礎を培う役割を担っている。

【自立した学習者の育成】

「自立した学習者」とは、今、求められる資質・能力を身に付けるために、自らの判断と意思で、生涯にわたって能動的に学び続ける姿であると捉えている。また、自立した学習者には、自らが自己の目標を設定し、目標達成に向けて自らの学びを主体的に調整し、実行し、進捗状況を評価し目標を再設定するといった、自ら学びを調整する力が必要であると考える。さらに、一人一人の子供を自立した学習者に育成していくためには、教師主導の授業から脱却し、一人一人の子供を主語とした学習者主体の授業へと「観」を転換していく必要がある。子供自身が学習の中心に立ち、主体的に学びを進める授業への改善である。

【研究主題及びサブテーマ】

そこで、本校では、研究主題及びサブテーマを「一人一人の子供を主語にした授業づくりを目指して」～全ての子供の可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実～とした。本来、学習の主体は子供である。子供は、学びたいと思っており、適切な学習環境さえ与えれば、喜んで学習する存在である。子供を主語にした授業とは、こうした「子供観」に立つ「子供が学ぶ」学習者主体の授業である。将来の社会を見据え、必要となる資質・能力を育成するに当たり、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の観点から学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた子供が主語となる授業改善に挑戦したい。

【研究の経緯と今後の方向性】

令和6年度に本研究を立ち上げ、主題に掲げた「一人一人の子供を主語にした授業づくり」を目指して、理論の研究及び実践研究を重ねてきた。この2ヶ年で、教師の「観」の転換は図られてきたと言える。また、学習が個に成立する単元の構想や、多様性を包摂する教材・学習方法等の選択を子供に委ねることにも理解が進み、子供が自らの学びを調整しながら学習を進めている姿が増えてきたことに成果を感じている。一方で、子供の学びを支える伴走者としての教師の役割については、実践を通して検討していく必要があることが明らかとなった。これらを踏まえて、今年度は、確かな学びが個に成立する単元を構想するとともに、子供の学びを支援する教師の役割を明らかにし、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を通して主題に迫っていくこととする。

3　研究の内容

一人一人の子供を主語にした授業により、主体的・対話的で深い学びを実現し、確かな学力を育成するとともに、自らの判断と意思で、生涯にわたって能動的に学び続ける自立した学習者を育成していくうえで、以下の内容に焦点化を図り、研究を進めていく。

（1）教科の本質に触れながら深い学びに至る単元の構想

自己選択・自己決定の場が保障された中で、主体的・対話的で深い学びを通し、育成したい資質・能力を身に付けることがきるような単元を構想する。

（2）自ら学びを調整する自己評価と振り返りの充実

一人一人の子供が、自ら学習状況を把握し、学習の達成感や成就感を味わうとともに、 その後の学習を自ら調整することができるようにする。

（3）子供の主体的な学びを支援する伴走者としての教師の役割

一人一人の子供が、必要に応じて自ら働きかけ、学びに向かうことのできる学習環境の整備、一斉学習の場において子供同士の協働的な学びを支えるファシリテート、子供が自ら問いを更新しながら学び続けるための支援など、教師の役割を明らかにする。

4　研究の方法

（1）ともに学びともに育つための研究組織づくり

一人一人の強みや持ち味、経験年数等を考慮し、これまでの経験値が異なる教師がともに学び、方向性を共有しながら新たな学びを創造できるような組織編成とする。

研究推進委員会は、校長、教頭、教務主任、研究主任、研究副主任で組織し、研究の内容や方法等について協議するとともに、研究全体会で成果や課題を共有する。

（2）理解を深め互いの実践に生かす協働の時間

研究組織を生かしながら、協働して授業づくりを構想したり、教材をつくったりする時間を設ける。教科の本質に触れながら子供を主語にした授業を実現するために必要な内容研究を協働的に行う。

（3）実践研究による子供の育ちの検証

研究の内容に基づく授業研究会を全員が行う。市の委嘱を受けて、他に開かれた公開授業を年3回実施し、それ以外は研究組織ごとの授業研究会とする。いずれの授業研究会でも、互いの授業に学び合う機会を確保する。

研究の3年次となる今年度は、子供たちの確かな学力を育むとともに、一人一人が自分らしく可能性にチャレンジしようとする態度を育成し、子供自身も自らの成長を実感できるようにしていく。

5　研究の計画

《1学期》・研究組織づくり
・5 月27日（水） 先行実践及び外部講師招聘
・7 月15日（水） 市委嘱公開授業①
・授業研究会

《2学期》・11月26日（木） 市委嘱公開授業②
・授業研究会

《3学期》・2月 10 日（水） 市委嘱公開授業③